

i-Construction 推進コンソーシアム（準備会）

議事概要

日 時：平成 28 年 10 月 18 日（火）9 時～10 時

場 所：国土交通省 特別会議室 央合同庁舎 3 号館 1 1 階 特別会議室

出 席：安宅委員、仮屋藺委員、小宮山委員、鈴木委員、建山委員、田中委員、富山委員（50 音順）

事務局より、これまでの i-Construction の取組（資料 1）、i-Construction 推進コンソーシアムについて（資料 2）説明し、意見交換を行った。

（主な意見）

- ・ 500 万人以上の人に関わる建設業界で i-Construction を進める社会的意義は大きい。
- ・ 土木分野の技術開発は現場で使いながら磨いていくものである。現場で試して改善していくフィールドを多く提供してもらいたい。
- ・ i-Construction は、国だけでなく、地方自治体の中小規模の工事にまで浸透・定着して初めて成功といえる。コンソーシアムでは、地方の中小規模の工事とも乖離することのない議論を行っていただきたい。
- ・ 実践工学は社会実装しないと進歩しない。また全てを自前の技術で賄う必要はない。
- ・ 組み合わせによるイノベーション（ソーシャルイノベーション）が必要である。規制や縦割りを排除し、スピード感を持って取り組んでももらいたい。AI や IoT は横軸を通すのに大変良いテーマである。
- ・ データが現場にどれくらい貢献するのかの見える化が必要である。効率化、安全確保、人材確保により、現場の風景が変わることが重要である。
- ・ データの所有権、利用権などの整理が必要。得られたデータをマーケットで取引するのか、公共財として利用自由とするのかは大きな課題である。
- ・ データ形式を合わせ、業界で利活用を促進するための体制・しくみの構築が必要である。
- ・ データ形式などが過度にカスタマイズ化される傾向にある日本の慣習を改善することが必要である。
- ・ 実現に向けては国内の才能に限らず、世界中の才能を集めることが必要。そのためには利活用できるデータの整備に加え、専門家の家族も含めた生活支援などが大切になる。
- ・ 現場で起きたことが様々な人にすぐに伝わるようコンソーシアムが機能すれば良い。
- ・ 工程表は最初のサイクルだけでなく、2 回目で皆がもっと知ることになり、2 回目以降の公募も検討が必要である。
- ・ 時間軸、マイルストーン、ゴールが示されており、i-Construction をテーマとしたベンチャー投資も行いやすくなる。
- ・ 専門分野を跨いでベンチャーを目指す学生がムーブメントを起こしている。彼らを参加させることは意義が大きい。
- ・ 生産性向上は失業率が高い国では社会問題となる。海外の技術開発ベンチャーに対しても日本が面白い取組を考えていることを知らせることが重要である。
- ・ トラックの自動走行、ドローン活用などによる土木・建設生産性向上のためには、自動走行可能な道の割合の拡大、ドローン飛行に適した街づくりを定量目標とともに作り上げていくことが必要になる。
- ・ 本日の議論を踏まえて、コンソーシアムの立ち上げ準備を行う。

以上